

立教学院創立130周年記念展

「立教学院と戦争-揺れた建学の精神-」

立教学院史資料センター（主催）



目次

はじめに	(1)	IV 敗戦から復興へ	(4)
I 財団法人立教学院の発足	(2)	おわりに	(5)
II 昭和初期の立教の諸相	(2)	展示内容・展示史料目録	(6)
III 日米開戦と立教	(3)	本資料について	(12)

はじめに

立教学院は、いまから130年前の1874（明治7）年2月3日、アメリカ聖公会の宣教師チャニング・ムーア・ウィリアムズ主教が東京・築地に開いた私塾として始まりました。

のちに「立教学校」と呼ばれるようになったこの塾は、やがて国の教育制度にのっとり多くの卒業生を高等学校、帝国大学へと送り出す中学校を設置し、また、私立学校としては相当早い時期に大学令による大学を持つなど、目覚ましい発展を遂げてまいりました。

しかし、先の戦争期、とりわけ日米開戦以降は、アメリカ聖公会を母体とするミッションスクールとして、おそらく一般の私学以上の困難と紆余曲折を経験することになったのです。

今回の展示では、この「15年戦争」あるいは「アジア・太平洋戦争」の時期に焦点をあてて資料を収集・公開しておりますが、これらを通じて、危機的状況下における立教学院の教育と経営の実態を、一端なりともご理解いただきたいと思います。

ともすると祝賀ムード一色に飾られがちなこの種の記念行事ですが、私どもは、あえてこのテーマを選びました。

それは私ども立教学院が、歴史を単なる宣伝の道具ではなく、自らの存在理由を確認するためのよりどころにしたいと考えるからです。

自らの歩んできた道を正しく認識し理解することなくしては、自らの将来に対する正しい判断はできません。「建学の精神」が最も危機にひんしたこの戦時下の立教のさまざまな歴史的事実を、私どもは自戒をもって、未来への糧にしたいと考えております。

こうした趣旨をご理解のうえ、どうぞごゆっくりご覧ください。

なおこの展示は、立教学院として初めての自校史研究機関として、2000年12月、大学に設置された「立教学院史資料センター」が企画・制作いたしました。

立教学院院長 松平信久

I 財団法人立教学院の発足

1899（明治32）年の文部省訓令第12号への対応から、立教中学校、立教専修学校、東京英語専修学校、立教中学校寄宿舎の統轄機関として誕生した立教学院は、その設立以来、米国聖公会経営の教育機関として存続してきた。1907（明治40）年、専門学校令にもとづき私立立教学院立教大学が設立され、1922（大正11）年には大学令による立教大学が認可された。

1911（明治44）年から在日聖公会系米英ミッションによって維持されてきた財団法人日本聖公会教学財団（理事長マキム）は、大学令による立教大学の認可を得るにあたり、財団法人聖公会教育財団（理事長マキム）と名称変更し、「基督教神学ノ教授其他教育事業ヲ為ス」として、聖公会神学院による神学教育を中心としてきた従来の財団の寄附行為の目的も「学校ノ経営ヲ為スニ在リ」と変更した。

1923（大正12）年に発生した関東大震災に対する復興支援の延長で、立教学院を拡張してきた米国聖公会は、1931（昭和6）年、財団法人聖公会教育財団から独立して、財団法人立教学院（理事長マキム）を設立。ここに立教学院は経営上、米英共同の財団から分離するとともに、神学教育から分離して、米国聖公会単独の教育機関として再出発することになった。

そのため財団法人立教学院は、その発足にあたり、寄附行為第二条「目的及事業」において「基督教主義ニヨル教育ヲ行フ」という目的を明示し、さらに「本條文ノ目的ハ変更スルコトヲ許サズ」と明記した。

II 昭和初期の立教の諸相

関東大震災を契機に、築地にあった中学校も池袋へ移転し、立教学院は、池袋キャンパスにおいて統合されることとなった。

昭和初期の立教中学校は、小島茂雄校長のもと、クラブ活動の組織である学友会の改組、自治組織である学校市会の創設、同窓会の創立、校歌の改訂など、様々な改革が行なわれた。また、教育面においては、理科教育や英語教育などに、特に力が注がれた。

一方、立教大学は、杉浦貞二郎、木村重治両学長のもと、予科教育の拡充と新校舎の建設（現・4号館）、学部における学位授与制度の確立、学内諸学会の発足など、教育・研究体制の充実が図られた。これにともない、学生数も年々増加し、予科の学生を含めると1,000名を超えるまでの規模となった。また、スポーツや文化活動など、諸方面における学生の活躍も目覚ましいものがあった。

しかし、こうした学園生活にも、軍国主義・国家主義化の影響が、着実に現れはじめていた。1925（大正14）年には、学生の思想対策と学校における軍事教育の振興を意図した陸軍現役将校学校配属令が公布され、立教においても軍事教練が行なわれるようになり、さらに、1930年代後半には、「御真影」や教育勅語を奉戴し、「皇国民」としての訓育が行なわれるようになっていった。

このような変化に対し、大学においては、一部学生が軍事教練に反対する動きなどを見せたが、1936（昭和11）年には、天長節（天皇誕生日）祝賀式における木村学長の勅語奉読に不敬があったとの理由で、学生側から、ストライキと学長の辞任を求めるといった騒動が巻き起こってしまう（チャペル事件）。現在においても事の真相は定かではないが、例年教室で行なわれていた祝賀式をチャペルにおいて行なったこと、勅語の奉読を祭壇や説教台よりも一段低いところで行なったことなどが問題とされたようである。

これにより、木村学長は辞任を余儀なくされるが、学生のこうした動きの背後には、一部校友の策動があったともいわれている。

Ⅲ 日米開戦と立教

日米関係の悪化は、米国聖公会と関係の深い立教学院にも影響を及ぼすことになる。1940（昭和15）年8月から9月にかけて、日本聖公会は米国聖公会からの経済的独立を決定し、基督教教育同盟会が教育機関の日本人化を含む時局への対応について申し合わせを行なう。このような状況のなか、立教学院の外国人教師たちは帰国の途につき、1940年10月はじめにはライフスナイダーが理事長・大学総長を辞任し、理事長に松井米太郎、学院総長・大学学長に遠山郁三が就任した。このように立教学院が日本化されていくなかで、ただひとり日本に留まっていたポール・ラッシュも、1941（昭和16）年12月の日米開戦直後に抑留され、翌年6月には強制送還されてしまう。

一方、戦時体制の進行によって、学生・生徒は直接戦争に結びつけられていく。そのひとつは農村や工場における労働力不足を補うために行なわれた学徒動員である。1941年以降、立教中学校および立教大学では、文部省の指示にもとづいて組織された「報国団」を基礎として、勤労働員が年30日以内で行なわれるようになる。戦況が悪化する1943（昭和18）年になると中等学校以上の学生・生徒の軍需工場などへの動員が本格化し、翌年には1年間を通じて常に動員されることになった。立教学院においても、学園に残っていた大学生と3年以上の中学生は教室を離れて工場に動員されることにより、事実上授業は停止状態に陥った。さらに、1945（昭和20）年4月からは国民学校初等科以外の学校での授業が停止されることとなる。

もうひとつは、学徒出陣である。1941年以降、高等教育機関の修業年限は3ヶ月から6ヶ月短縮された。これは、徴兵が猶予されていた高等教育機関の学生たちの卒業を早め、士官となる人材を早く集めるための措置であった。さらに1943年には、在学中の徴兵猶予が停止され、いわゆる学徒出陣が実施される。学生は、学業のなかばではあっても、戦地に赴かなければならなくなったのである。

軍国主義・国家主義の波は、立教の存在意義であるキリスト教的な要素をも奪っていく。1942（昭和17）年9月、立教学院は、文部省の意向や学院内の反キリスト教運動に屈し、発足以来の目的である「基督教主義ニヨル教育ヲ行フ」を「皇国ノ道ニヨル教育ヲ行フ」に変更し、立教大学の目的に謳われていた「基督教主義ニ基ク人格ノ陶冶」を削除しなければならなくなった。同じ頃、立教学院のキリスト教主義の象徴であったチャペルも閉鎖されてしまう。

さらに、1943年には、理工系の教育を拡充して戦時態勢に即応させようとする文部省が、文科系の大学に対する理工系への転換、移転整理、専門学校への転換などの方針を明らかにした。そのため、医学部設置が頓挫し理工系学部をもたない立教大学は、存続の危機に立たされた。理科専門学校の設置や文学部の閉鎖はこのような状況への対応であった。

このように、日米開戦以降の立教学院では教育が変質し、建学の精神や学校の存続が脅かされることになった。しかし、戦災をほとんど受けなかったのは「不幸中の幸い」であった。

IV 敗戦から復興へ

戦災を免れた立教であったが、大学は築城本部や食糧倉庫、中学校は豊島区役所仮業務所と食糧倉庫、陸軍の宿舎と化していた。それでも、敗戦直後の1945（昭和20）年9月からは授業が開始され、不十分ながらも学園としての機能を取り戻しつつあった。

授業開始からまもない10月20日、GHQから2人の係員が立教大学の視察に訪れる。ひとりとはかつて立教大学で教鞭をとったことのあるポール・ラッシュであった。立教学院の記録によれば、ラッシュらは大学当局に対し、①予科校舎と食堂の清掃が不十分であること、②ミッション・スクールである立教大学が依然として「御真影」を「奉安」していること、③チャペルのタブレットを取り外し、椅子を防空壕の覆いに使用したことこの3点について遺憾の意を表したという。このとき撮影されたと思われる写真には、戦前のチャペルにみられたスクリーンや椅子、祭壇周辺の装飾品などがことごとく撤去されたチャペルの姿が鮮明に記録されている。

この視察にもとづいて、10月24日に発せられたGHQの「信教の自由侵害の件」では、チャペルへの「蛮的行為」や寄附行為の目的変更が「信教の自由に対する侵害」としてとりあげられ、幹部11名の追放と立教学院の再建が求められることとなる。

キリスト教主義にもとづく再建をせまられた立教学院は、10月31日付けで指名された11名の職を解くとともに、11月10日には戦時中に変更した法人寄附行為の目的を戦前の「基督教主義ニヨル教育ヲ行フ」にあらためる申請を文部大臣に提出した。

追放された11名のなかには大学総長・工業理科専門学校長であった三辺金蔵や中学校長であった帆足秀三郎が含まれていた。そのため、立教学院の再建は、彼らに代わって暫定的に各校の責任者（総長・校長事務取扱）となった須藤吉之祐によって開始されることとなる。本格的な再建は、1946年6月に各校の総長・校長に就任した都立高等学校（現・都立大学）校長・佐々木順三によって着手された。

当時作成された立教学院拡張計画は、ラッシュの構想をもとにして作り上げられたものであり、日本聖公会を中心とする教会、教育機関、病院などの総合的な発展を説くものであった。立教学院に関しては、法学部・政治学部・文理学部・医学部の新設による立教大学の総合大学化や初等科の創設による一貫教育の整備などが構想されている。

おわりに

立教学院創立130周年記念展「立教学院と戦争—揺れた建学の精神—」をご覧くださいまして有難うございました。展示を企画・制作いたしました「立教学院史資料センター」を代表してお礼申し上げます。

創立130周年を祝う企画としてはまさに異色のテーマを掲げたこの展示ですが、いかがご覧いただけましたでしょうか。

とりわけ「寄附行為の変更」など、「建学の精神」の動揺にまつわるエピソードについては、今では語られることも少ないだけに、外部の方はもちろん、学院に属する教職員や学生等にとってもショッキングだったのではないかと推察いたします。こうした事実を踏まえれば、「立教学院は130年間、一貫してキリスト教による教育を行なってきた」などとひとことで述べることは難しくなるのですから。

私どもが、ある意味で「冒険」をしてまでこのテーマにこだわった理由は、ここに 있습니다。

この展示をご覧いただいて、「建学の精神」とは、放っておいてもただそこにあり続けるというものではなく、われわれが日々の活動の中で、真摯に歴史を振り返りつつ新たな判断を重ねることによって守り育ててゆくものだということを汲み取っていただきかけたのです。

冒頭で松平院長も申し上げておりますように、立教学院は自校の歴史を、自らの存在理由を再確認し、より良い未来への判断を促すための根拠とすべきだと考えております。130周年を機に、私学の、ミッションスクール立教の建学の精神とは何だったのか、皆様に再度お考え戴く機会になれば幸いです。

なお、この展示の企画・制作にあたった「立教学院史資料センター」は、2000年12月、立教学院の自校史研究機関として大学に設置されました。翌年からは、当時の総長の特命により研究プロジェクト第1号「立教学院と戦争に関する基礎的研究」も始まりました。

ちょうどそのころ、戦争を体験された卒業生の有志が学内への「平和の碑」建設をはたらきかけておられました。「碑」は2001年11月チャペル敷地内に建立され、戦没者名簿も納められました。

こうして、学生を多数戦場に送り出した「歴史」を負っている私立学校にとって、戦時下の自らのありようを真摯に振り返り総括する、おそらく最後の機会が与えられたのです。私ども立教学院史資料センターは、そのことを肝に銘じて、研究活動を続けて行く所存です。

立教学院史資料センター
センター長 老川慶喜

展示内容

はじめに 院長 松平信久
年表
立教学院沿革図

立教学院歴代首脳者
I～IV 解説および写真パネル
おわりに 老川慶喜センター長

展示史料目録

I 財団法人立教学院の発足

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	財団法人立教学院寄附行為	「財団法人立教学院寄附行為」	立教学院史資料センター所蔵
2	初代理事たちの顔ぶれ	『立教大学新聞』第104号 立教 大学新聞学会 1931（昭和6）年 9月30日 2面	立教大学図書館所蔵
3	米国聖公会の日本宣教の全体像	<i>The Spirit of Missions</i> , Nov. 1931, Vol. XCVI, No. 11, pp. 760-61.	立教大学図書館新座保存書庫所 蔵

II 昭和初期の立教の諸相

(1) 昭和初期の教育体制

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	立教学院組織図		
2	校舎配置図	Catalogue of St. Paul's University 1928-1929.	立教学院史資料センター所蔵
3	ライフスナイダー学院総長	立教大学卒業アルバム（商科）1925（大正14）年3月	立教大学図書館所蔵
4	杉浦貞二郎大学学長		大久保なほ子氏提供・所蔵
5	小島茂雄中学校校長	立教中学校卒業アルバム 1927（昭和2）年	立教中学校・高等学校所蔵

(2) 昭和初期の立教中学校

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	学校市制（原案）	「立教中学校 学校市制（原案）」1925（大正14）年11月 [タイムカプセルT8]	立教学院史資料センター所蔵
2	1931（昭和6）年度選出学校市議員	『いしすゑ』第20号 立教中学校学友会 1932（昭和7）年2月27日	立教中学校・高等学校所蔵
3	化学実験	立教中学校卒業アルバム 1927（昭和2）年3月	立教中学校・高等学校所蔵
4	中庭での執銃訓練	立教中学校卒業アルバム 1928（昭和3）年3月	立教中学校・高等学校所蔵

(3) 昭和初期の立教大学

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	チャペル事件を報じる『中外商業新報』の記事	『中外商業新報』中外商業新報社 1936（昭和11）年7月2日付 夕刊 2面	国立国会図書館所蔵
2	学生の出身地域	『第二回立教大学学生生活調査報告』立教大学学生課 1943（昭和18）年11月30日	立教学院史資料センター所蔵
3	授業風景	立教大学卒業アルバム（商学部） 1933（昭和8）年3月	立教大学図書館所蔵
4	野外教練		羽木光三郎氏提供・所蔵

Ⅲ 日米開戦と立教

(1) 日米開戦とラッシュ教授の抑留

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	開戦時の首脳陣		
1-1	松井米太郎理事長	<i>The Spirit of Missions</i> , Jan. 1931, Vol.XCVI, No.1, p. 4.	立教大学図書館新座保存書庫所蔵
1-2	遠山郁三学院総長・大学学長	立教中学校卒業アルバム 1942 (昭和17)年3月	立教中学校・高等学校所蔵
1-3	帆足秀三郎中学校校長	立教中学校卒業アルバム 1943 (昭和18)年3月	立教中学校・高等学校所蔵
2	宣戦の詔書捧読式	『立教大学新聞』第3号 立教大学新聞部 1941 (昭和16)年12月10日 3面	立教大学図書館所蔵
3	ポール・ラッシュ教授	「ブランスタッド文書」	立教学院史資料センター所蔵
4	日本に留まる決断を下したラッシュ教授のメッセージ	『立教大学新聞』第10号 立教大学出版部 1941 (昭和16)年10月1日 1面	立教大学図書館所蔵
5	抑留生活中の手帳		ポール・ラッシュ記念センター提供／財団法人キープ協会所蔵
6	ラッシュ教授への感謝状		ポール・ラッシュ記念センター提供／財団法人キープ協会所蔵
7	ラッシュから遠山学院総長に宛てた書簡	『立教大学庶務課文書』	立教学院史資料センター所蔵
8	交換船で帰国する際の乗客名簿	RG59 : General Records of the Department of state Records of the Special War Problems Division Subject Files, 1939-1954,Box.66 .	米国国立公文書館カレッジパーク館所蔵

(2) 戦時体制化の進展：中学

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	陶製の中学校の帽章		伊藤俊太郎氏提供・所蔵
2	木製の門扉と制服姿の中学校5年生	立教中学校卒業アルバム 1943 (昭和18)年3月	立教中学校・高等学校所蔵
3	「学校市」から「報国団」に	立教中学校学校市「大正十五年度 学校市諸記録」	立教中学校・高等学校所蔵
4	「立教中学校報国団及報国隊に就いて」	『いしすゑ』第39号 立教中学校報国団 1941 (昭和16)年12月27日 1頁	立教中学校・高等学校所蔵
5	立教中学校報国隊の腕章		伊藤俊太郎氏提供・所蔵
6	学校教練教科書 前編 (術科之部)	陸軍省兵務課編纂「学校教練教科書前篇 (術科之部)」	伊藤俊太郎氏提供・所蔵

(2) 戦時体制化の進展：大学

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	立教大学報国団組織図	『立教学院学報』第7巻第7号 財団法人立教学院 1941（昭和16）年5月6日 1面	鈴木隆氏提供／立教学院史資料センター所蔵
2	立教大学報国団理事会	『立教大学新聞』第20号 立教大学新聞部 1943（昭和18）年5月10日 1面	ポール・ラッシュ記念センター提供／財団法人キープ協会所蔵
3	尽忠隊編成表	『立教大学新聞』第1号 立教大学出版部 1941（昭和16）年10月1日 1面	立教大学図書館所蔵
4	教練を終えて	立教大学卒業アルバム「紫友」（経済学部商学科） 1942（昭和17）年〔9月〕	高柳宏氏提供／立教学院史資料センター所蔵

(3) 戦時下の学園生活—勤労働員と学徒出陣：中学

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	勤労働員出動式を記した「教務日誌」	立教中学校「教務日誌」	立教中学校・高等学校所蔵
2	大日本油脂へ動員された4年生		立教中学校・高等学校所蔵
3	勤労成績表	立教中学校「昭和十九年七月四学年二組勤労成績表」	立教中学校・高等学校所蔵
4	壮行会	立教中学校卒業アルバム 1944（昭和19）年3月	立教中学校・高等学校所蔵

(3) 戦時下の学園生活—勤労働員と学徒出陣：大学

No.	資料タイトル	出典	所蔵
5	学徒出陣式		立教学院史資料センター所蔵
6	教室に書き残された学生のメッセージ		上住昇平氏提供／立教学院史資料センター所蔵
7	愛児素子を抱く植村眞久		靖国神社遊就館提供・所蔵
8	植村が愛児にあてた遺書		靖国神社遊就館提供・所蔵
9	キリスト教式による慰霊祭	『立教大学新聞』第9号 立教大学新聞部 1942年8月10日 1面	立教大学図書館所蔵
10	神式による慰霊祭	『立教大学新聞』第22号 立教大学新聞部 1943（昭和18）年7月10日 1面	立教学院史資料センター所蔵

(4) 建学の精神の動揺

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	大学学則と学院寄附行為の変更を決定した理事会の記録	「財団法人立教学院第五十四回理事会記録」1942（昭和17）年9月29日	学校法人立教学院本部事務局所蔵
2	「寄附行為改正認可申請書」	「財団法人立教学院 寄附行為中変更認可 昭和十八年」	立教学院史資料センター所蔵
3-1	学則改正認可申請書	『立教大学諸申請書・認可諸綴（Ⅰ）』	立教学院史資料センター所蔵
3-2	「基督教主義ニ基ク」が削除された学則	『立教大学諸申請書・認可諸綴（Ⅰ）』	立教学院史資料センター所蔵
4	卒業礼拝の取りやめを決定した大学部長会の記録	立教大学「部長会記録」1942年9月15日	立教学院史資料センター所蔵
5	チャペルの一時閉鎖を報ずる大学新聞	『立教大学新聞』第13号 立教大学新聞部 1942（昭和17）年10月10日 1面	立教大学図書館所蔵
6	チャペルを「修養堂」と改称	「内規」〔遠山郁三「日誌」1942（昭和17）年10月に添付〕	立教学院史資料センター所蔵

(5) 非常時における立教学院の対応

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	遠山総長日誌	遠山郁三「日誌」	立教学院史資料センター所蔵
2	医学部設置認可願	「医学部設置認可願」	立教学院史資料センター所蔵
3	医学部設置認可申請書取下げ	「官公署往復書類（二）」	立教学院史資料センター所蔵
4	立教理科専門学校設置認可申請書	「東京都 第二七冊 立教工業理科専門学校設置廃止 第二教育門を五ノ二」	国立国会図書館提供・所蔵
5	立教理科専門学校設置認可書	「立教大学諸申請書・認可書綴（Ⅱ）」	立教学院史資料センター所蔵
6	出征を前にした理科専門学校の生徒		小宮山昭一氏提供・所蔵
7	松崎半三郎理事長		立教学院史資料センター所蔵
8	三辺金蔵大学総長	立教大学卒業アルバム「芙蓉」1941（昭和16）年3月	立教大学図書館所蔵
9	大学の存続を希望する文部省への回答	「財団法人立教学院第七十一回理事会記録」1943（昭和18）年11月29日	学校法人立教学院本部事務局所蔵

(5) 非常時における立教学院の対応(続表)

No.	資料タイトル	出典	所蔵
10	文学部閉鎖をめぐる混乱を記した教授会メモ	「文学部教授会記録 自昭和十六年五月 至昭和十八年一月 ー教授会成立ヨリ 文学部閉鎖ニ至ルー」	立教学院史資料センター所蔵
11	文学部の処遇を議論した理事会の記録	「財団法人立教学院第七十二回理事会記録」1944(昭和19)年1月8日	学校法人立教学院本部事務局所蔵
12	戦争末期の学生数調査	「学部入学志願者入学者学生数及卒業生数調ノ件」1944(昭和19)年11月29日 『立教大学庶務課文書』	立教学院史資料センター所蔵

(6) 空襲

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	池袋上空の空襲		伊藤俊太郎氏提供・所蔵
2	池袋の空襲の様子を記した立教中学校生徒の日記		伊藤俊太郎氏提供・所蔵
3	日記の筆者 伊藤俊太郎		伊藤俊太郎氏提供・所蔵
4	中学校の教務日誌にみる本校周辺の被災状況	立教中学校「教務日誌」	立教中学校・高等学校所蔵
5	池袋の焼跡	立教中学校卒業アルバム 1946(昭和21)年3月	立教中学校・高等学校所蔵
6	学院の罹災状況	「官公署往復書類(二)」	立教学院史資料センター所蔵
7	大学の罹災状況	「罹災調査書提出ニ関スル件」1945(昭和20)年10月24日 『立教大学庶務課文書』	立教学院史資料センター所蔵

IV 敗戦から復興へ

No.	資料タイトル	出典	所蔵
1	戦後直後のチャペル	RG111-SC : Record of the Office of the Chief Signal Officer, Box72-214735.	米国国立公文書館カレッジパーク館所蔵
2	スクリーンがあったころのチャペル	〔アルバム1939～41（昭和14～16）年〕	立教学院史資料センター所蔵
3	チャペルの祭壇の破損状況を調べるポール・ラッシュ	RG111-SC : Record of the Office of the Chief Signal Officer, Box72-214733.	米国国立公文書館カレッジパーク館所蔵
4-1	GHQ覚書「信教の自由侵害の件」（英文）	「財団法人立教学院第八十六回理事会記録」1945（昭和20）年10月27日	学校法人立教学院本部事務局所蔵
4-2	GHQ覚書「信教の自由侵害の件」（日文）	「財団法人立教学院第八十六回理事会記録」1945（昭和20）年10月27日	学校法人立教学院本部事務局所蔵
5	「信教の自由侵害の件」に対する立教学院の回答	「官公署往復書類（二）」	立教学院史資料センター所蔵
6	「法人寄附行為変更認可申請」	「官公署往復書類（二）」	立教学院史資料センター所蔵
7	須藤吉之祐	立教大学卒業アルバム「芙蓉」1941（昭和16）年3月	立教大学図書館所蔵
8	佐々木順三		立教学院史資料センター所蔵
9	拡張計画案	『立教大学新聞』第41号 立教大学新聞部 1947（昭和22）年10月30日1面	立教大学図書館所蔵

本資料について

本資料は立教学院史資料センターのサイトで掲載していた、立教学院創立130周年記念展「立教学院と戦争-揺れた建学の精神-」をPDF化したものです。PDF化にあたっては一部、表示形式を改めました。

この展示は、2004年5月8日から15日まで立教大学太刀川記念館1階ロビーで開催されました。そのため、資料に記載されている情報はすべて、当時のものです。展示の詳細については、『立教学院史研究』（第3号、2005年）をご参照ください。

立教大学立教学院史資料センター

2017年7月1日